

オーロビルのスピリチュアリティと宗教の関係

福田 薫

はじめに

オーロビル (Auroville) は、インドの政治家、思想家、詩人であるオーロビンド・ゴシュ (Aurobindo Ghose, 1872-1950) のスピリチュアルな思想体系を背景に、オーロビンドの後継者、通称マザーとして知られるミラ・アルファッサ (Mirra Alfassa, 1878-1973) が人類の調和を目指す国際実験都市として、1968年に南インドに創立した共同体である。19世紀後半、近代化の風圧にさらされていた欧米人が精神的拠り所としてヒンドゥーイズムなどの東洋思想を「発見」し、霊との交信、降霊術などへの関心も高まる中で起きた神智学運動に代表される西洋と東洋の接合による思想実践運動 (樫尾, 2010, p. 74) の流れには、西洋的な思想やキリスト教に対する東洋からの動きとしてヴィヴェーカーナンダらによるネオ・ヒンドゥーイズムなど、伝統的インド思想を捉えなおすものが見られ、一般的にこのカテゴリーにオーロビンドも含まれる (Minor, 1998, p. 21)。梵我一如を唱え、神秘主義的性格の強いオーロビンドのスピリチュアルな思想は、ヨーガに依拠し、あらゆるヨーガの本質を取り入れながら、そのいずれにも縛られない (ヒース, 2011, p. 162) 「インテグラル・ヨーガ (Integral Yoga)」と呼ばれており、人間の意識の拡大・進化によって、自己変容・超越、さらには人類全体や世界の変容を目指すものである。こうしたオーロビンドのスピリチュアリティによって人類統合を実現する場として造られたのが、オーロビルという目的共同体 (intentional community) である。

オーロビルは公式に「オーロビル内に宗教は存在しない」と表明しており (“Frequently Asked Questions on the Vision of Auroville,” 2015)、代わりにそこで

実践されるのはスピリチュアリティであるとして、両者を峻別している。これまでのオーロビルやその他の目的共同体とスピリチュアリティに関する研究では、そうした宗教とスピリチュアリティの区別は自明とされ、いずれもそれをア・プリオリに無批判に受け入れているように思われる¹⁾。しかし、本稿ではオーロビルの文脈における宗教とスピリチュアリティは自明なまでに異なっているのではないのか、それらの間に明瞭な線引きはできないのではないのか、との前提に立ち、両者の区別（否定関係）という論点から、オーロビルにおけるスピリチュアリティの在り様とはどういうものか、スピリチュアリティと宗教とはどういう関係性にあるのか、について明らかにすることを試みる。

なお、議論を明確にするため、本稿ではスピリチュアリティを「オーロビルにおいて、またはオーロビリアン（Aurovilian：住居や仕事を含め、生活の基盤をオーロビルに置き、正式登録されたオーロビルの住民）によって、スピリチュアリティとして説明・実施される精神・身体の修養」、宗教を「実在論的变化を含む、聖なるものとの関わり」と定義する。

研究方法は、文献調査とフィールドワークを併用する。オーロビルでのフィールドワークは2018年の9月および2019年の9月の2回、合計約3週間実施し、参与観察に加え、滞在中に知り合った10年以上のオーロビル在住歴を持つオーロビリアン3名と、ニューカマー（Newcomer：オーロビリアンになるため、オーロビルにてトライアル期間中の住民）1名の合計4名からの協力を得てインタビューをおこなった。本稿ではプライバシーに配慮し、インタビューの出身国と性別以外の属性情報は伏せ、仮名を使用している。

1 オーロビル誕生の背景

創設後50年以上を経た現在も、オーロビルでは至る所にオーロビンドとマザーの写真、彼らの著作や講話からの引用句が飾られ、この二人がオーロビルの思想的・精神的中心として、オーロビリアンの生活を支えていることが感じられる。以下、オーロビル創設の小前史として、二人の生涯や思想、宗教観を概括する。

1.1 オーロピンドの生涯

オーロピンド・アクロイド・ゴーシュは、1872年8月15日にカルカッタに生まれた。幼少期から英国で教育を受け、1890年にはケンブリッジのキングス・カレッジに入学するが、1893年にインドへ帰国した。1906年頃からはインド独立運動の急進派として政治活動に積極的に関わる一方、独学でヨーガを始める。1908年に「生の基盤を揺るがすような最初のスピリチュアルな体験」(ヒース, 2011, p. 69)をし、その後テロ活動に関与した疑いで逮捕・収監されている時にもスピリチュアルな体験をする。釈放後、オーロピンドは宗教と政治との間に区別を設けていなかったインド的生の復興を目的に、カルカッタで週刊評論紙「カルマ・ヨーギン」を発行した。新聞の名になっているカルマ・ヨーガ (Karma Yoga) は「仕事のヨーガ (Yoga of Work)」として知られ、ヴェーダーンタとヨーガを日々の生活を通して実践する修練である。ヨーガ修行のために隠遁者になる必要はなく、「最高にスピリチュアルな生活を営んでいるのは、普通の人生を、ヨーガから力を得て、ヴェーダーンタの法に従って生きる者である」(ヒース, 2011, p. 69) と考え、スピリチュアルな修練と政治的活動の統合を図る生活を送っていたオーロピンドにとって、政治活動はスピリチュアルな活動、ヨーガ修練の外的な現れであったと言える。しかし、英国警察やインド帝国政府に過激派として危険視され、再逮捕の可能性も高かった彼は、神の啓示に従い、1910年に南インドのフランス領ポンディシェリーへ移住した。以降、オーロピンドは政治運動からは退き、スピリチュアルな修行に専念することとなる。

彼がミラ・アルファッサから最初の訪問を受けたのは1914年である。オーロピンドの信奉者の集団(後にアシュラムとなる)内でも活発で実践的能力が高いミラの役割は次第に大きくなり、1920年代後半にはオーロピンドは彼女を大母神という意の「マザー (the Mother)」と呼ぶようになった。

1926年に上位精神の降下²⁾を経験した後、オーロピンドは隠遁生活に入り、弟子の指導やアシュラム運営はマザーに委ねられた。年に数回、弟子達に会う以外は一部の部屋に引きこもり、マザー以外の人と話すこともほとんどなかったと言う。オーロピンドは1950年12月5日に78歳で永眠した。

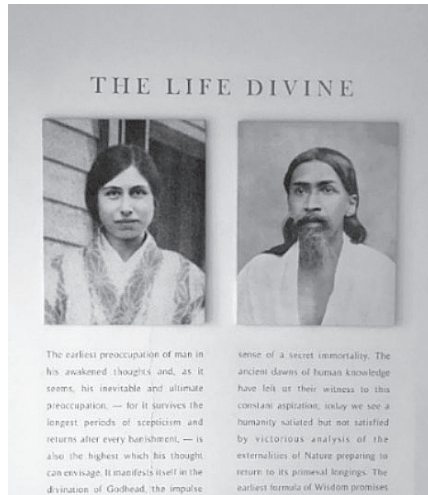


写真1 オーロビンドとマザー
(2018年9月オーロビルにて筆者撮影)

1.2 マザーの生涯とオーロビル創設

ミラ・ブランシュ・ラシェル・アルファッサは、1878年2月21日にフランス、パリの裕福な家庭に生まれ、美術の専門教育を受けた。幼少期からスピリチュアリティとオカルトに興味を持ち、20代の頃は「西洋の物質主義・個人主義の暗黒時代に対抗する『オリエント』の知の伝統を高く評価し、称賛する」(Beldio, 2018, para. 7) と謳う神秘主義グループに参加していた。1914年に夫と共に初めてオーロビンドをインドに訪ね、1920年の再訪後は彼に師事し、以降の生涯をボンディシェリーで送った。スピリチュアルな素養と明るい性格により、オーロビンドのアシュラムにおけるミラの役割は徐々に大きくなっていき、後に「マザー」と呼ばれる中心的存在となる。特に1950年のオーロビンド死去後は、アシュラムにおいて、スピリチュアル面および物質面で唯一のリーダーとなった。

1950年代後半、彼女はオーロビルの原型となるような、コミュニティの構想を抱き始める。それはオーロビンドのビジョンや希望の実現の一環であった(Minor, 1998, p. 46)。マザーは1965年、オーロビルの計画に取り掛かり、1968

年2月28日にはインド国内外から5,000人が集うオーロピル創設セレモニーが開催され、オーロピルの建設が着手された。5年後の1973年、95歳でマザーは逝去し、遺体はオーロピンドと同じ、アシュラムの中庭の墓所に安置された。

1.3 個人と集団

オーロピル誕生の遠景として、共同体や人々の集団に関し、オーロピンドがどのような考えをもっていたかを確認しておきたい。オーロピンドは著作の中で、個人の存在を重視し、個人がスピリチュアルな進化の鍵となると言う（ヒース、2011, pp. 189-190）。つまり、進化の担い手としては、集団よりも個人を優先する傾向が見られ、社会の目的は、個としての人間とその集合である人類が個人の成長を通じ、神的完全性へ進んでいけるようにすること、と考えていた（ヒース、2011, pp. 253-254）。しかし、それは個人がスピリチュアルな進化の中で超精神の次元を実現するにあたっては、個人はほかの人々の進化の実現に参加し、彼らと共にある、という関係性におけるものである。

個人と集団に関するオーロピンドの考えは、個と集団、個と普遍の弁証法であり、一貫して「統合する」ことを重視する。ネオ・アドヴァイタの一派とみなされることもある彼にとって（Minor, 1998）、二元論の克服の試みは当然であった。こうした統合は、エリアーデが指摘するように、近代合理主義以降、歴史的に限定された個人³⁾としての存在からの回復を欲する人々が、意識的であれ無意識であれ、求めているものであり、ニューエイジ的なスピリチュアリティ、「モダニズムに対する異議申し立て」としてのスピリチュアリティ（榎尾、2010, pp. 73-84）にも通底するものである。

1.4 オーロピンドとマザーの宗教観

宗教に対し、オーロピンドとマザーは異なる意見を有していた。オーロピンドは、自らのスピリチュアルな体験や修養を「宗教」「宗教的」と呼ぶことに躊躇がなかった（Minor, 1998, p. 21）。彼にとって宗教と世俗は分離していなかったのである。オーロピンドはスピリチュアルな宗教が「真の宗教」である

としたが、それは知性や倫理を超越したものであった (Minor, 1998, pp. 32-33)。

一方、マザーは宗教に対して否定的な見解を持つ。オーロビルを宗教の入り込まない共同体にしようとし (Minor, 1998, pp. 52-54)、宗教と自分達のスピリチュアルな実践、インテグラル・ヨーガを峻別していた。極端に言えば、マザーにとってスピリチュアリティとはオーロビンドの教えのことを指し、それ以外はすべて宗教であって、一考に値しないもの、組織的で硬直化した規則と儀礼に満ちた独善的なものであった。彼女にとって、宗教は精神 (Mind) のレベルのもの、教義・ドグマと同じものであるが、経験に基づいて様々な考えを統合するオーロビンドのスピリチュアリティの体系は、精神の上位に位置する完全に別のものであった (Minor, 1998, p. 43)。日本人のコウジは「宗教という、組織のガチガチの教義とかのイメージです」(2019年9月15日インタビュー)と語り、フランス人オーロビリアンのジャスは「これまで宗教に関心を持ったことなどない」(2019年9月14日インタビュー)と、宗教への否定が感じられるトーンで語っていることから、マザーの宗教観はオーロビリアン達のそれとも重なっていることが窺える。

2 オーロビルの概要

2.1 地理的・社会的特性

オーロビルはタミル・ナドゥ州の州都、チェンナイからベンガル湾に沿って150kmほど南下した地点に位置する。インド連邦直轄領、ポンディシェリーからは北に約10km離れた、面積870ha (“Auroville in Brief,” 2017)の共同体である。

マザーの構想と、それを受けてオーロビルを設計・デザインした建築家、ロジェ・アンジェの案に基づき⁴⁾、オーロビルはマトリマンディル (Matrimandir : オーロビルのアイコン的建造物。「オーロビルの魂」としてマザーが構想した瞑想の場)を中心として4区画に分けられ、用途や目的に応じ、国際 (international) ゾーン、文化 (cultural) ゾーン、居住 (residential) ゾーン、産業 (industrial) ゾーンと名付けられている。国際ゾーンには、世界の国や地域

の文化を紹介するパビリオンが配置されており、各パビリオン建設を企画・推進するのは当該国・地域出身のオーロピリアンで、このエリアはオーロビルの掲げる「多様性の中の人類の調和」を促進するためのものである。旅行者の宿泊手配やマトリマンディル・ツアーの予約をおこなうビジター・センターもこの区画にある。文化ゾーンは、学校などの教育施設、音楽ホールなどの文化・芸術施設やスポーツ施設を擁する教育・文化活動のエリアである。居住ゾーンには環境やエネルギー問題に配慮した色々な建築様式の居住施設（集合住宅タイプが多い）、生鮮野菜など日用品を提供している施設や共同食堂の「ソーラー・キッチン (Solar Kitchen)」などが集まっている。産業ゾーンは、アート作品や工芸品の工房、行政部門のオフィスなどが配された、オーロビルのビジネスのためのエリアである。

オーロピリアンやニューカマーなど、オーロビルの恒常的居住者を対象にした2019年11月のセンサスによると (“Census,” 2019)、オーロビルの全人口は3,173人、そのうちオーロピリアンは2,061人であった。3,173人中、18歳以上の成人が2,393人、未成年は780人、成人での男女比は、ほぼ1：1（男性



写真2 オーロビル内の道
(2018年9月オーロビルにて筆者撮影)

1,192人、女性1,200人)である。全住民3,173人の国籍は57か国にわたり、人数別上位5か国は1位から順にインド(1,415人)、フランス(449人)、ドイツ(259人)、イタリア(170人)、アメリカ(105人)となっている。全人口の平均年齢は39.6歳(成人の平均は47.7歳、未成年の平均は9.7歳)である。

オーロビルで最もよく使用される言語は英語である。そのほかにはフランス語や地元のタミル語も使われている。特に、近隣の村からオーロビルに働きに来ている人々は、タミル語を使っていることが多いようである。

2.2 ガバナンス、経済、生活基盤

オーロビルの管理・運営は、オーロビリアン自身によっておこなわれる。特定の集団や個人に権威を持たせかねない仕組みを避け、直接民主制的な形で意思決定をおこない、各人が自発的に共同体運営に関わることを原則とする。ただし、資産管理などの責任はオーロビル財団(Auroville Foundation)にあり、1988年にインド政府が制定したオーロビル財団法に基づき(“Auroville Foundation Act 1988,” 2014)、限定的であるが政府が運営に介入する。オーロビリアンの起業やゲストハウス収入などの経済活動は商業部門が管理し、その総収入の3分の1はオーロビルに寄付・還元され、共同体運営を支える。とは言え、財源の多くは国内外の個人や団体からの寄付、インド政府の助成金や税の優遇措置などに依存する(“Unity Fund & Auroville Fund,” 2016)。

食料に関しては、オーロビル内の複数の自然・有機農園とポンディシェリーの青果市場から調達される。また、電気などのインフラ提供に加え、オーロビリアンとオーロビル外の地域住民の生活向上に貢献できるよう、自然・有機農業を通じた近隣村落との連携、それらの農園で栽培された有機作物を使用した食品製造や飲食店経営などの経済・商業プログラム、環境に負荷の少ないエネルギー利用や循環型社会を推進する環境プログラム、オーロビリアンの子供や近隣村落の子供のための学校教育プログラム(プレスクールから高校、社会人教育や特別支援教育まで、学校・教育施設が合計20箇所以上)、演劇や音楽、スポーツなどの文化娯楽プログラム、保健センターや診療所などの保健衛生プログラム(ホメオパシーを含め、ホリスティック医療中心。重篤な疾患の場合

は近隣都市の病院へ行く) など、オーロビリアンによる幅広い活動・取り組みがなされている。また、公的機関や企業と連携したプログラムもオーロビル内外で実施されている (Litfin, 2013, pp. 181–182; “Project Coordination Group,” 2015)。

2.3 参加・入会プロセス

オーロビルへの参加・入会の手続きは、入会委員会 (Entry Board)、入会事務局 (Entry Secretariat)、メンター・グループ (Mentor Pool) から成る入会部門 (Entry Service) が取り扱う。オーロビリアンによると「入会プロセスはストレスが溜まる」ものであり、相応の決意や覚悟が必要となるようである。

オーロビリアンとなるには、複数のルートがあるが (“Admission Policy,” 2018)、いずれも過去に旅行客など何らかの形でオーロビルに滞在経験があり、一定程度オーロビルの知識があることが必須前提条件となる。一般的な入会プロセスは次の通りである。まず入会希望の旨を事務局に連絡し、メンターとなるオーロビリアンを決め、1～1年半のニューカマー期間をオーロビルで働きながら過ごす。途中複数の必須プログラムに参加し、共同体についての知見を深めていく。最後にメンターと共に入会委員会の面談を受け、オーロビルの環境に馴染み、オーロビリアンとして関わることができそうか、オーロビルとその理想についての理解は十分か、経済状況は健全か、などの点が確認され、特に問題がなければ、晴れてオーロビリアンとなることができる。

3 オーロビルにおける宗教とスピリチュアリティ

オーロビルでは宗教について「オーロビルではいかなる宗教も広められることはありません。宗教一般は神 (Divine) へ近づくためにそれぞれが選んだ道として敬意をもって扱われますが、それらはまた人類全体を分断する原因としても見られるものです。そのため、オーロビルの第一目標である、多様性の中で人類調和の実現にはつながりません。宗教の代わりに、オーロビリアンはスピリチュアルな生活を実践することとなっています」 (Auroville in a Nutshell, 2017, p. 30) と説明する。

前述のように、マザーの宗教に対する拒否は激しく、1970年には「オーロビルは、本質的に神 (Divine) の生活を送りたいと願う者のためにあり、古代宗教、現代宗教、あるいは未来宗教であろうと、すべての宗教を棄てる者のためにある」(Sri Aurobindo Ashram Trust, 2015, p. 43) と言い、その前年には「宗教は無し、無し、無し……私達は宗教は要らない」と断言している (Minor, 1998, p. 53)。また、オーロビル自体も「オーロビルには宗教は存在しない」「オーロビルは宗教的な共同体ではない」ことを標榜している (“Frequently Asked Questions on the Vision of Auroville,” 2015; *Auroville in a Nutshell*, 2017, p. 30) が、実際にオーロビルを訪れ、オーロビリアンの生活を観察したり、話を聞いたりすると、そのようなオーロビルの宗教の不在、否定に関する言説に疑問が生じてくるように感じられる。ここでは共同体内で観察される宗教的象徴と体験を取り上げ、エリアーデの論に基づき宗教学的解釈をおこなう。

3.1 聖なる中心：マトリマンディル、バニヤンツリー (Banyan Tree)、 野外円形劇場

オーロビルの中心には、金色の球形をしたマトリマンディルが位置する。その傍には、樹齢100年を超えるといわれるバニヤンツリー (ベンガルボダイジュ) と野外円形劇場があり、このバニヤンツリーがオーロビルの厳密な地理的中心である (*Auroville in a Nutshell*, 2017, p. 14)。

この場所をオーロビルの中心と定めた経緯は、神話的な逸話に語られている。1965年、オーロビル建設の場所がなかなか決まらずにいたある日、建築家のロジェ・アンジェが地図を持ってマザーの部屋を訪れた。彼女は精神を集中させると、地図上のある地点に指を置いた。アンジェはジープを駆って、マザーの示した地点に向かったところ、その場所に大きなバニヤンツリーが一本、他には何もない赤土の不毛の地にしっかりと根を張って立っているのを見つけた。彼がこれをマザーに伝えると、バニヤンツリーはインドの神聖な7つの木の一つだとして、彼女は非常に喜び、このバニヤンツリーをオーロビルの地理的中心に定めたのである (Fassbender, 2018, p. 32; “Matrimandir—The Banyan Tree,” 2015)。

この逸話は宗教的象徴とイメージに満ちている。マザーの行為は、カオスを中心という秩序をもたらす超越者の宇宙創造の振舞いであり、また、その振舞いに超越者からの徴表を読み取り、神意が示された場所を探してそこを中心に定め、「祭壇を建立し、その周囲に村落を作る」(エリアーデ, 1993, p. 20) という、宗教的人間の営みでもある。

パニヤンツリーも象徴的な植物である。それは宇宙樹、世界樹であり、天界、地上、地下を結んで世界を支える存在として解釈される。

マトリマンディルはマザーにとって「スピリチュアルな中心」であり、「オーロピルの魂」(Minor, 1998, p. 61)であったが、当時のオーロピリアン達にとっても、聖所であり、瞑想によって超越の次元に触れ、神と交流し、変化・進化がもたらされるパワフルな場であると捉えられていた(Minor, 1998, p. 65)。マトリマンディルの建設には37年の歳月がかかり、コウジによると、建設中には「マトリマンディルさえできれば、すべてがうまく行くんだ、と言う人達もいた」(2019年9月15日インタビュー)とのことだが、現在のオーロピリアンにとっても、マトリマンディルは特別な場所と言えるようである。マトリマンディルへよく行くのか、という筆者からの質問に対し、ベルギー人のリースの答えは「あまり行かない」(2018年9月17日インタビュー)というものだったが、インタビュー外の普通の会話で「マトリマンディルには特別なパワーを感じる」と言っていた。インド人のバスキも、マトリマンディルには「あまり行かない」(2018年9月16日インタビュー)と言っていたが、マザーによるパニヤンツリー発見の逸話を筆者に最初に語ってくれたのはバスキであった。コウジは「1時間でもマトリマンディルで瞑想をすると、昨日までのストレスや反発や怒りが薄れて、新しい自分になって一日をスタートできる感じがする」(2019年9月15日インタビュー)と語り、ジャスはマトリマンディルの中で瞑想はしないが、「夕方にはマトリマンディルの周囲を歩いて色々考えたりするのが日課だ」(2019年9月14日インタビュー)とのことだった。

マトリマンディル内部が、緩やかな螺旋状のスロープによって上下がつながる構造となっている点にも注目すべきである。螺旋構造は、中心に至るための試練、実在を獲得するための困難を象徴する。つまり、マトリマンディルに入

り、瞑想ルームに至るまでの螺旋スロープは、中心に触れて実在を得、変容するための巡礼路なのである。内部に入る際には履物を脱ぎ、一旦裸足になって、案内係から渡される白い靴下を履かねばならないが、これは日常からの分離として衣類を脱ぎ、旅装束をまとうことに比される。白という色からは死に装束のイメージも喚起され、実在を得るための象徴的な死とも解釈できる。また、マトリマンディル内では一切口をきくことは許されないが、沈黙も象徴の次元では死に相当する。スロープを進み、マトリマンディルの瞑想ルームに辿り着くと、部屋中央には巨大な水晶玉が安置され、天井から受けた光がその水晶玉を通して下へ貫く仕掛けとなっており、ここにも天界、地上、地下を結ぶ世界の中心軸、アクシス・ムンディ（axis mundi）の象徴（エリアーデ、1993, pp. 29-34）が繰り返されている。

隣接する野外円形劇場には、オーロビル創設セレモニーの儀式において世界124か国とインド23州の土を取めた壺が据えられ、ここはオーロビル創造時の原初の時空を現前させる場所であるとわかる。現在も野外円形劇場はオーロビル創立記念日やオーロビンドとマザーの生誕記念日の行事をおこなう、儀礼の場となっている（“Matrimandir—The Amphitheatre,” 2014）。



写真3 マトリマンディル（左側）とパニヤンツリー
（2018年9月オーロビルにて筆者撮影）

3.2 イニシエーション：参加・入会プロセス

オーロビルの参加・入会プロセスは文字通り、イニシエーションの象徴と解釈できる。公式ウェブサイトにも「オーロビルに来て住むということは気楽にできる決断ではありません。それは自分が馴染んできた環境や取り決め、居心地の良い場所、考え方を離れるということです」(“Joining Auroville: An Introduction,” 2018)と記載があるが、社会的変化と存在論的变化が生じ得る重大な行為であるとの含意がそこには存在する。

具体的には、例えばオーロビリアンになりたい旨を入会部門に告げても、すぐにニューカマーとなれるわけではない。短期間であるが、ニューカマーでもなく旅行者でもない、という「何者でもない」状態を経験しなくてはならず、これは新たな存在となるための死の象徴と見てよい。また、ニューカマー期間中の参加必須の所定プログラムは入会候補者に秘伝、聖なる秘密を授ける場である。入会部門による面談や審査はイニシエーションの試練を端的に象徴し、「入会プロセスはストレスがたまる」とのオーロビリアンの言葉が示すように、入会希望者は試練の期間を耐えなければならない。これらを乗り越えた者が生まれ変わり、オーロビリアンとしての新しいステータスと新たな存在を獲得する。エリアーデが以下のように言う通りである。

加入式の秘密は新入者に対し、しだいしだいに真の生存の次元を明かす。加入式は彼を聖なるものの中へ導き入れ、それによって彼に人間としての責任を負う義務を与える。(エリアーデ, 1993, p. 181)

オーロビルの参加・入会プロセスは、入会希望者の準備・トライアル期間という実的な目的を持って実施されているが、象徴的には前述のように彼らにオーロビリアンというステータスだけでなく、存在の刷新・変容をもたらす。オーロビリアンとなった者は真の實在を与えられるが、換言すれば、オーロビルではオーロビリアンだけが真の實在を持つ存在なのである。

3.3 天地開闢：オーロビル建設

元々は木もまばらな痩せた赤土の広がる土地であったオーロビルを現在の緑豊かな環境に変えたのは、実際にその身をもってオーロビルに参加し、建設に汗した初期のオーロビリアン、神話の語る始祖のような響きをもつオールド・オーロビリアン (Old Aurovilian) 達である。実際、コウジは神話の中の始祖の御業を語るような口ぶり、「オールド・オーロビリアン達がオーロビルを作った時とは、今はもうまるで違う」(2019年9月15日インタビュー) と、力に満ちた太初の時を懐かしむように語った。土を耕し、木を植え、石を運び、道を作った彼らの行為が、カオスに秩序をもたらす天地創造に比される仕事であることは明らかである。ここではさらに、オーロビルの国際、文化、居住、産業ゾーンの4区画に関連して、マトリマンディルを中心にしたこれら4区画の設定はマザーによる構想であったこと、居住地を中央から4つに区分けすることは「宇宙を四つの方角に区分することに照応する」(エリアーデ, 1993, p. 38) のであり、宗教的人間の思考を反映するものであることを指摘しておきたい。宗教的なものを拒否したマザーの中に、このような「一つの中心から四つの方角が投射されるのは、古い、きわめて広く行われた思想」(エリアーデ, 1993, p. 39) が確認できるのである。

3.4 召命と自己放棄

リースは2009年にオーロビルにやって来た、ベルギー出身のオーロビリアンである。政治や社会問題にも関心が高く、知的でリベラルな人との印象を受ける。オーロビルに来た理由を尋ねた筆者に、彼女は次のように語った。

筆者：それで、オーロビルのどんなところに一番惹かれたの？

リース：そういう言い方はできないわ。だってそういうのとは全然違っていたから。まるでスピリチュアル・コーリング (spiritual calling) とでもいうような感じだった。自分の家族にも説明したけれど、誰も理解できなかった、なぜ私が結婚生活を壊そうとするのか。と言っても相手とは本当に結婚していたわけじゃないから、結婚生活を壊してはいないわ

ね。でも4年間、私達は一緒にいて、とても安定した関係にあった。それを突然、オーロビルに来るためにすべて壊そうとしたから。みんな……家族は特に「何が起こったの？」という感じでわからなかったみたい。私は説明できなかつたし。家族にとっては、まるで修道院が何かに行くみたいな感じで。とにかく、それは私にはしなくてはならないことだった。とても深いコーリングで、それを本当に聞かなくてはならなかつた。

筆者：つまり、何かに呼ばれた、と？

リース：すごく大げさに聞こえるけど、そういう感じだったのよ。

(2018年9月17日インタビュー)

彼女は「この人で、こういう経験をしている人は多い」(2018年9月17日インタビュー)とも言っており、これはオーロビリアンの間では必ずしも珍しい体験ではない様子である。リースは最初、知人の引越しを手伝いに行った時に、偶然その知人宅にあった Georges van Vrekhem によるオーロビンドとマザーについての本、*Beyond Man*⁵⁾を読んだことで「引き寄せられた (It drew me.)」のだと言う。

自分でもわからないが、従わざるをえない超越的な何かに呼ばれている、命じられている、というような強い宗教体験は人間の実在の地平を変えずにはおかない。このような経験において、人間は「旧い構造にまとりついた自己を脱皮するように脱ぎ」、「『裸』になって生のトータリティーを回復」(荒木, 1987, p. 25)し、新たな人間に生まれ変わる。リースの場合、コーリングに自分を委ね、仕事や結婚生活、家族などを手放し、インドへ向かい、オーロビリアンとして生まれ変わり、自分にとって真に意味のある生活を営むこととなった。

オーロビンドもこうした召命に従った。彼が1910年にベンガルからポンディシェリーに向かい、政治活動から退いたのも、そうするようにとの召命を受け、それに従った結果であった (ヒース, 2011, pp. 116-117)。オーロビルの文脈では、これらはスピリチュアルな体験によるスピリチュアルな自己変容とし

て捉えられ、説明されるが、そこに宗教的体験と同じ意味と構造を見ることが出来る。

3.5 個人と共同体

一般にスピリチュアリティは個人的志向が強いと言われる（島蘭，2012；樫尾，2010）。オーロビルにおいても、スピリチュアルな実践は個人に任せられている。しかし、意識の進化により内面から自己変容するのであれば、オーロビルに来ずとも、どこであろうとそれはおこなえるはずである。ではなぜ、オーロビルに来るのか？ これに対し、ジャスは「同じ目標や考えを持つ人々が一緒にいると、良い影響がある」（2019年9月14日インタビュー）と答えてくれた。コウジも「人間は居る場所、その周りとは常に交流があると思うんです、意識する、しないに関わらず。そばに霊的能力が高い人がいたら、その影響を受けると思います」（2019年9月15日インタビュー）と話していた。これらからは、組織を嫌い「個人主義的で共同行動が乏しい」（島蘭，2012，p. 22）とされることの多いスピリチュアリティのイメージに、必ずしもおさまらないものが窺える。オーロビルという共同体を形成している点からも、オーロビリアンの言うスピリチュアリティは集団的、共同体の志向が色濃く、個人と集団に関するオーロビンドの弁証法的思想が影響していると考えられる。

おわりに

以上から、オーロビルにおけるスピリチュアリティの在り様とはどういうものか、スピリチュアリティは宗教とどのような関係性にあるのかについて、次のように考察されよう。

オーロビンドは自分のヨーガ修養を「宗教的」と表現し、宗教と世俗の領域を区別しない。彼のスピリチュアリティは対立するものの弁証法を含み、スピリチュアリティか宗教か、という分断を乗り越える、あるいは元来分断を設定しないものである。その一方で、マザーは宗教を独善的で排他的なものとして捉え、強く否定する立場を取り、宗教と自分達の実践するスピリチュアリティを峻別する。オーロビルでのスピリチュアリティの在り様は、共同体内での精

神的・思想的支柱としての力を持つオーロピンドとマザーの影響を当然受けている。ただし、オーロビルはマザーが基本構想を練って創設したものであるため、共同体内での彼女の影響はより直接的で大きくなり、インタビューに見られるように、オーロビリアンにマザーの宗教観が共有または反映され、オーロビルの宗教に対する姿勢が否定的なものとなりがちなのではないか。つまり、オーロビルではその事象が宗教的かどうかに関わらず、それはそもそも宗教的ではありえず、スピリチュアルという在り様でしか認められないと思われる。そこには、オーロピンドの立場に基づく対立や排除の超克を目指す志向と、マザーの影響を受けた独善と排除に傾く志向によるねじれがあり、マザーに従って宗教を否定するほどにオーロピンドの思想との矛盾が大きくなり、彼のスピリチュアリティの統合的、弁証法的な性格と乖離した在り様になってしまっている。しかし、共同体の構築やそこへの参加など、(オーロビリアンにとって)直接的には「宗教」とは無関係とされる側面においては、個人と集団をめぐるオーロピンドの弁証法的思想が生かされ、集団的・共同体的志向が強いオーロビルのスピリチュアリティとして結実していると見ることができる。

オーロビルにおいてスピリチュアリティは宗教とどのような関係性にあるのか、という問題に関しては、オーロビルは宗教的ではない、といくら主張したとしても、そこにはやはり存在論的変容に関わる宗教的な象徴、宗教的な体験が見られ、エリアーデが言うように、「宗教的世界観の幾分かは俗なる人間の振舞いのなかにも、たとい彼がこの遺産にいつも気づくとは限らないにしても、生き続けているのである」(エリアーデ, 1993, p. 42)ということが与っている点をまず指摘したい。宗教にネガティブな姿勢をとるマザー自身も、宗教性と無縁ではない。例えば、彼女の構想したマトリマンディルとその周囲は聖なる中心としての象徴に溢れており、マザーの言うスピリチュアルな中心とは、宗教的人間にとっての聖なる中心である。また、そのマトリマンディルを中心にオーロビルを4つに分ける構想を立てたのもマザーである。オーロビリアンがオーロビルに来たきっかけとなったコーリング、召命も宗教的体験として理解可能である。これらは、非宗教的と自認する者にも宗教的人間の思考と態度などが残存しており、人間は本来的に宗教的存在であることを示唆すると

捉えられる。

こうした視点に立てば、オーロピルはけして宗教の真空地帯ではない。しかし、現代人であるオーロピリアンにとって、近代的自我としての個人（の限界性）は簡単に昇華できず、また宗教の集団性・共同性や、教団宗教に特に見られるような独善性は否定や反発の根拠となりやすく、「個人」を抑圧すると感じられる「宗教」に対する忌避感強い。それが「オーロピルは宗教の存在しない、宗教とは関係ない共同体」との認識や言説を支えているのではないかと推察される。その一方で、インテグラル・ヨーガによるスピリチュアリティ実践においては、個人性を突破する統合的な自己変容が求められていることを鑑みるに、個人性の超越、存在論の次元での自己変容は、広義で宗教を捉えるならば、宗教的象徴を介した超越的実在との接触や宗教的体験によってもたらされるのであり、このような自己変容を中心に据えて眺めた場合、オーロピルにおける宗教とスピリチュアリティはその区別に意味はなくなり、トートロジカルな関係にあると言えよう。

一般にスピリチュアリティ研究において、スピリチュアリティは宗教（性）の一つの現れであると理解される。本稿はそれを確認したにすぎないとも言えるが、宗教を拒否し、スピリチュアリティとは峻別するという態度は、スピリチュアリティに基礎を置く（spiritually-based）共同体であるオーロピルのアイデンティティに関わるものと考えられ、そこには師弟であるオーロピンドとマザーの違いに加え、時代状況、インドという場所の固有性、さらにそれらを構築する様々な事物が錯綜し、影響し合っている。これらを視野に収めた広範な見地からの検討が今後の課題となる。

注

- 1) 例えば Kirby (2014) は英国の目的共同体での宗教とスピリチュアリティの機能を検討し、Minor (1998) や Meier (2006) はそれぞれオーロピルを対象に、インドの世俗主義やスピリチュアリティによる自己構築について論じるが、いずれも宗教とスピリチュアリティは異なり、区別されるものであることを前提としている。
- 2) インテグラル・ヨーガによるスピリチュアリティの体系では、意識の世界には下位領域（物質、精神、生命の次元）と上位領域（純粹存在、純粹意識、純粹歓喜の次

元)があり、上位領域が真の現実を形成し、これら上位と下位の領域の間には二つの領域をつなぐ次元として超精神 (Supermind) が存在する。超精神は (通常状態の) 人間の知性にとっては、「超理性的」なものであり、「その働きも、私たちの分析的理解にとっては秘密不可思議なもの」である。本質的な人間存在は超精神 (Supermind) と同じである、と言えるが、外面的には人間の意識はオーロビンドが精神 (Mind) と呼ぶ、進化的な運動性を持つ意識のレベルにある、とされる。精神は下位領域にある次元であり、そこから超精神との間にはさらにもう一つの次元、「超意識的な宇宙精神」である上位精神 (Overmind) がある。オーロビンドは意識がより高い次元へ向かうことを「上昇 (Ascent)」、高い次元の力が下に向かって流れることを「降下 (Descent)」と呼ぶ。詳細はシュリー (2009) およびヒース (2011) を参照。

3) 直線的、不可逆的な時間の流れる歴史を発見し、その中で生きる近現代の人間 (個人) の歴史的限定性を、エリアーデは「歴史の恐怖」として論じ、ヘーゲル以降の歴史主義に対する鋭い疑問を投じる。詳細は、エリアーデ (1981) 参照。

4) ロジェ・アンジェは1966年に最初のマスター・プランを作成したが、それはマトリマンディルを中心に、銀河をイメージした旋回する円の形でオーロビルの町が展開されている案 (Galaxy Model と呼ばれる) で、これに適宜変更を加えながら、現在も町の建設が続いている。

詳細は <https://www.auroville.org/contents/691> および <https://www.auroville.org/contents/2864> 参照。

5) 筆者も読んでみたが、第二次大戦中のナチスドイツの侵攻をオーロビンドとマザーがスピリチュアルな力で止めた、といった話を書いてあるため、読者を選ぶ著作かもしれない。著者の van Vrekhem (1935-2012) もオーロビリアンであり、何冊かオーロビンド関連の本を書いている。

引用文献

Auroville in a nutshell. (2017). Auroville, India: Prisma.

Fassbender, F. (2018). *Inauguration of Auroville—Concept and purpose.* Auroville, India: Prisma.

Kirby, J. (2014). *Religion and spirituality within environmental communities: Place and significance in the UK context* (Doctoral thesis, University of Leeds). Retrieved from <http://etheses.whiterose.ac.uk/7482/>

Litfin, K. T. (2013). *Ecovillages: Lessons for sustainable community* (1st ed.). Malden, MA: Polity.

Meier, J. (2006). Being Aurovilian: Constructions of self, spirituality and India in an international

- community. *J@rgonia*, 10, 1–23.
- Minor, R. N. (1998). *The religious, the spiritual, and the secular: Auroville and secular India*. NY: State Univ of New York Press.
- Sri Aurobindo Ashram Trust. (2015). *The Mother on Auroville*. (n.p.) Sri Madanlal Himatsingka.
- Van Vrekhem, G. (2012). *Beyond man: The life and work of Aurobindo and the Mother*. Stichting Aurofonds. <https://www.auro-ebooks.com/beyond-man/>
- 荒木美智雄 (1987). 『宗教の創造』 京都：法蔵館。
- エリアーデ, ミルチャ 堀一郎 (訳) (1981). 『永遠回帰の神話——祖型と反復』 東京：未来社。
- エリアーデ, ミルチャ 風間敏夫 (訳) (1993). 『聖と俗：宗教的なるものの本質について』 東京：法政大学出版局。
- オーロピンド, シュリー 山口泰司 (訳) (2009). 『抄訳 神の生命 (いのち) —— 霊的進化の哲学』 東京：文化書房博文社。
- ヒース, ピーター 柄谷凜 (訳) (2011). 『評伝オーロピンド』 東京：インスクリプト。
- 島嶺進 (2012). 『現代宗教とスピリチュアリティ』 東京：弘文堂。
- 樫尾直樹 (2010). 『スピリチュアリティ革命——現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』 東京：春秋社。

ウェブサイト

- Auroville. *Admission Policy currently used by Entry Service*. (2018, Apr). <https://www.auroville.org/contents/1201> (2020年1月10日アクセス)
- Auroville. *Auroville Foundation Act 1988*. (2014, Aug). <https://www.auroville.org/contents/540> (2020年1月1日アクセス)
- Auroville. *Frequently asked questions on the vision of Auroville*. (2015, Apr). <https://www.auroville.org/contents/3376> (2020年1月8日アクセス)
- Auroville. *Joining Auroville: An introduction*. (2018, Dec). <https://www.auroville.org/contents/4449> (2020年1月8日アクセス)
- Auroville. *Matrimandir—The Amphitheatre*. (2014, Nov). <https://www.auroville.org/contents/2140> (2020年1月8日アクセス)
- Auroville. *Matrimandir—The Banyan Tree*. (2015, Apr). <https://www.auroville.org/contents/2139> (2020年1月8日アクセス)
- Auroville. *Project Coordination Group*. (2015, Jul). <https://www.auroville.org/contents/2832> (2020年1月8日アクセス)
- Auroville. *Unity Fund & Auroville Fund*. (2016, Dec). <https://www.auroville.org/contents/2836>

(2020年1月2日アクセス)

Beldio, P. (2018, Oct). *The Mother (née Mirra Blanche Rachel Alfassa)*. WRSP. <https://wrlldrels.org/2018/10/13/the-mother-nee-mirra-blanche-rachel-alfassa/> (2020年1月5日アクセス)

The Relationship between Spirituality and Religion in Auroville

Kaoru FUKUDA

Auroville, an intentional community located in India, was founded by the Mother who was a spiritual partner of Sri Aurobindo, with the aim of achieving human unity resulting from personal transformation through Aurobindo's spirituality known as Integral Yoga. It officially and publicly states that the community is not a religious, but a spiritual one; its website asserts that there is no religion in Auroville.

While most of research on spirituality in Auroville and other intentional communities appear to regard the distinction between religion and spirituality as evident and manifest, and uncritically accept it without reviewing, the basic premise in this study is that such distinction/separation, within the context of Auroville, is not so obvious as is said, in spite of the community's official and definitive rejection of religion that distinguishes it from spirituality.

Questioning in terms of the distinction between spirituality and religion how spirituality is situated in Auroville and what relationship it forms with religion/religiousness, based on data collected through fieldwork and literature review, I argue that religion/religiousness is observed in Auroville, especially in the form of religious symbols and experience, which, along with spirituality, can bring about transformation of consciousness and, that the nature of the relationship between religion and spirituality can be viewed as tautological, from the perspective where an emphasis is placed on the aspect of human transformation.